

大好きって言

L o v e r s

m e m o r y

梶原葉月

大和書房

大好きって言って！

1992年11月26日 第1刷発行

著 者——梶原葉月

発行者——大和和明

発行所——大和書房

東京都文京区関口1-33-4

電話 03 (3203) 4511

振替 東京6-64227

印刷所——暁 印 刷

製本所——小泉製本

©1992 H・Kajiwara Printed in Japan

ISBN-4-479-68067-5

乱丁、落丁本はお取替します

はじめに

「テレビドラマの脚本を書いてもらえませんか？」

それはこんな一本の電話から始まった。

「トレドラも、あんまり見ない私に……？」

大胆な話だとは思ったけれど、私は三月のあるポカポカした日に、市ヶ谷の日本テレビを訪れる。

「ラブソングをテーマにしたショート・ドラマを作りたいんすよオ。胸がキューンみたいなヤツを！」

なんだか面白そう！

若いディレクター三枝さんの勢いに押された私は、まったく自信も脚本の経験もないまま『DAISUKI!』という番組に、作家として関わることになった。

考えてみると、ヒットするラブソングには必ず身近にあるようなシチュエーションが盛り込まれている。だから聴く人に共感を与えるのだ。

テレビのドラマは一本一〇分前後という短いものだったけれど、私は自分の回りにある『本当の恋の話』を参考にするよう心掛けた。

この本はそのドラマを小説に書き直し、一話に一本のエッセイを付け加えたものだ。

それぞれのストーリーには本当にあった恋のエッセンスが含まれているし、エッセイには、女のコが恋や生き方を考える時に、チョッピリ参考になるかもしれないヒントが隠されている。もちろん、おいしいデコレーションが一杯のロマンス小説っていうワケではないし、エッセイだって恋愛の技術を伝授する、ハウツーものではないけれど……。

でも、イヤ、だからこそ、本当の恋を探している女のコにはきっと役にたつに違いないと私は思うのだ。

自分の人生と恋愛をちゃんと見つめ直したい女のコたちに、この本を贈ります。



Contents

はじめに
1

Lovers' memory 1

うれしいたのしい大好き
10

〈ESSAY〉直球の恋

Lovers' memory 2

フレンズ
30

〈ESSAY〉恋のドロドロとつきあう

Lovers' memory 3

月夜のロケット花火
46

〈ESSAY〉キャンパスの恋が社会に出るとき

友達のまま——64

〈ESSAY〉0と1の間

Lovers' memory 5

愛を止めないで——78

〈ESSAY〉身近な幸せの芽について

Lovers' memory 6

スローバラード——94

〈ESSAY〉環境が全く違う二人の恋

Lovers' memory 7

はじまりはいつも雨——108

〈ESSAY〉幸せのオーラ

Lovers' memory 8

そして僕は遠方にくれる——124

〈ESSAY〉男が遠方にくれるとき

Lovers' memory 9

もう一度

140

＜ESSAY＞ 忙しい男

Lovers' memory 10

KISSES

138

＜ESSAY＞「なかつたこと」について

Lovers' memory 11

冬がはじまるよ

174

＜ESSAY＞大塚あつ子について！

あとがき

187

大好きって言うて！

Book Design/ Koji Ueno
Photo/ Shigeki Kanazawa
Hair & Make/ Yukari Nishiyama(masculin)
Model/ Rebecca



Lovers' memory 1
うれしかったのしい大好き

「あらーッ、あなたのは珍しい前世だわあ！　とつても数奇な運命よオ」

分厚いシャドウに、紫の口紅、目元にはラメが光るド派手な化粧。占いのおばさんは水晶の玉に手をかざすと、目を細めた。

「本気にしてるのお、佳奈子！　バカみたい」

よく晴れ上がった午後。

原宿駅の自動券売機にコインを入れながら、久保田カリンはまだ隣でクスクス笑い続けている佳奈子を睨んだ。

「だってエ。佳奈子の前世はエジプト王家に仕えた女官で、勇敢な戦士だった山岡先輩とは結ばれていたらって言ってもらえたもん」

「もう、バツかしい！　大学行くわよ」

「でもカリンは凄いやねー」

佳奈子は思いたすと、またおおげさに吹き出す。

「前世がローマ街道建設のための敷石を運んだロバだなんてエ！」

「ホラア、三限に遅れちゃうでしょー」

カリンは不満そうに、笑い転げる佳奈子の腕をひっぱって、ホームに降り立った。

都心から少し離れた高級住宅街にある大学。緑が多くこぢんまりしたキャンパスは、春の香りにあふれている。

レンガ造りの旧館校舎と近代的な図書館の間に挟まれて、影の薄いコンクリートの建物が学生ホール。その一角が、カリンたちが誘われたサークルのたまり場になっていた。

「ねえねえ、カリン。野村先輩とはどーなったのよお？」

「えっ！」

突然、佳奈子に予期せぬ質問をぶつけられてカリンは「午後の紅茶」の罐を落としそうになる。

「な、なによ……ソレ」

「だってみんなそー思ってるわよお」

「そんな事言われたってえ」

「カリン……大学入ったら、五月までにはサークル内でツーショット決めとくのが常識よお」

佳奈子はヘアマニキュアで茶色に染めた長い髪をかきあげ、身を乗り出した。

「いーじゃない。野村先輩、おぼっちゃまくんだし」

「そーかなあ」

「超グーだってェ！」

「でも……」

言いかけた瞬間、誰かの手がカリンの背中をたたく。

驚いて振り返ると、話題の主であるサークルの三年生、山岡と野村が笑いながら立っていた。

「よォ」

「あつ、せんぱァーい」

山岡の顔を見て、佳奈子が少し甘ったれたような声を上げる。

「新歓コンパ、今度の木曜に決まったから。新人は全員参加だからね」

「えーっ、もちろんですよォ」

「カリンもだよ……」

念を押すように付け足すと、野村はカリンの隣のイスに腰をおろした。

いかにも遊びなれた感じがするこの二人は、いつもメンノン系のファッションで決めている。

「ところで、二人とも、この後の授業は？」

山岡が切り出した。

「あたしは……もう終わり、カリンもないよねえ……」
と、嬉しそうな佳奈子。

「よし、じゃあ、みんなでどっか行こうか？」

そう言われて、カリンはあわてて立ち上がった。

「あ、あたし、バイト……」

カリンがバイトをしているのは、駅前のハンバーガー・ショップだ。高校の頃から夏休みや春休みにはずっとこの店でバイトをしてきたし、なによりも同じ年頃のスタッフが多
い、ラフな雰囲気が好きなのだ。

ミニスカートのユニフォームに着替え、鼻歌を歌いながら二階の更衣室を出ると、大きなバンズのケースを抱えた男が前を横切る。

「へえ、久保田さんって、ドリカムとか聴くんですかア……」

先週から入ったバイトの新人、中里武志。日に焼けたたくましい顔に、優しげな目が笑っている。

「ドリカムっていうの？ FMで聴いて気に入ってるんだ」

「やだなあ、ドリームズ・カム・トゥルーですよ。今、すごいメジャーなんだけどなあ。今度CDでも貸して上げましょうか」

「どおせ、私の前世は流行にのろいロバですよ……」

「えっ、なにか？」

「なんでもない」

一階の厨房から呼ばれ、慌ててケースを抱えたまま走りだす中里の背中に、カリンが声を張り上げる。

「ね、じゃ今度CD貸してね」

夜八時。いつものようにバイトを終えたカリンが店から出てくると、路地に止まっていた紺のサープが近づいてくる。